

おけらになった話

小川未明

青空文庫

あるところに、あまり性質せいしつのよくない男おとこが住んでいました。この男は平気へいきで、うそをつきました。また、どうしてもそれがほしいと思えば他人たにんのものでも、だまってそれを持つて帰かえりました。

こういう人間にんげんをば、世間せけんは、いつまでも知らぬ顔かおをしておきませんでした。みんなは、だんだんその男をきらいました。その男と交際こうさいすることを避けました。けれど、そんなことで、この男は、反省はんせいするような人間にんげんではなかったのであります。

とうとう男は、悪いことをしたために、捕とらえられて牢屋ろうやへいれられてしまいました。いままで、自由じゆうに、大空おおぞらの下を歩いていたものを狭苦せまくるしい牢屋ろうやの中で送おくらなければならなかったのです。

「あの男おとこも、ついに牢屋ろうやへいれられてしまった。こんどは、すこしは、目めがさめるだろう。そして、真人間まにんげんになつて、出てきてくれればいいが……。」と、みんなはうわさをしていました。

牢屋ろうやへいれられた男は赤い舌したを出だしていました。

「おれが魔法使まほうつかいのことを知らないか、ばかどもめが……。」「といって、冷笑れいしょうして

いました。

この男は、いつ、その牢屋から逃げたものか、わずかのまに、そこにいなくなってしまうました。

牢屋の番人は、たまげてしまいました。まったく影のごとくに消えてしまったこの男を、普通のものとは思われなかったのです。

男を知っているものは、そんなうわさをしているやさきに、男が、目の前へ姿をあらわしたものですから、びつくりして、

「はや、おまえは、牢から出たのか？」と、いうものもあれば、

「いつ、そんなからだになったのか……。」と聞いて、あまり、その許されようの早いのにあきれたものもありました。

男は、ずるそうな目つきをして、みんなの顔を見まわしながら、にやにやと笑って、

「なんで、こんなに早く許されるものかな、おれは、逃げてきたのさ。しかし、おれを捕らえておくなどということは、無理だよ。おれは魔法使いだからな。」と答えました。

みんなは、腹の中で、ほんとうに、この男は、魔法を使うのだろうか？　なんにしても、また困ったことができたものだと思つたのであります。

男は、さかんに悪いことをしました。しかし、世間は、それを許すものではありませんから、じきにまた捕らえられてしまいました。こんどは、手きびしくされて、ふたたび逃げられないように、牢屋の中へいれられてしまいました。

「こんどは、ゆだんをして、この男を逃がすようなことがあつてはならないぞ。」と、番人は、目上の役人から注意をされました。

番人は、またと、そんなような手落ちがあつては、自分の生活に關係すると、不安に感じましたから、日夜怠りなく、この男を注意したのであります。

「こんどは、あの男も、逃げ出してくるようなことがあるまいから、まあ安心していてもさしつかえない。」と、彼を知つて、迷惑を受けたことのある人たちは話をしていました。

ちやうど、このとき、男は、牢屋の中で、このまえのように大胆にも、赤い舌を出して、

「おれを知らないのか。いまに見ろ、魔法を使つて、この牢屋から逃げ出してやるから。」といつていました。

その男は、まったく人間とも思われなかつた早業の名人で、また、さるのように、

すばしこく木の上へ登ることもできれば、また風のように、すこしのすきまがあれば、そこからはい出すことができるのであります。

あるあらしの晩に、この男は、ふたたび牢屋から、姿を消してしまいました。牢屋の扉にかかっている錠もそのままであれば、なにひとつあたりに、かわったこともなかったのに、男ばかりは、いなくなつたのであります。

こうなると、この男のうわさは、世間にひろまりました。そして、平生、男を知っている人々は、安心して家にいることができませんでした。また、取り締まる役人たちは、このままに捨ててはおかれないので、こんどは、どういうようにしたらいいかということを協議したのであります。

広い世間は、だれ一人として、この男を悪者だといって憎み、おそれ、きらわれないものがありません。こうなると、男は、思うように牢屋を逃げ出したけれど、自分の身を置くところになかつたのでした。

あちらに隠れ、こちらに隠れていましたが、搜索が厳重であつたために、また捕らえられてしまいました。

「おまえは、魔法を使うというが、こんどばかりは、逃げ出されないぞ。」と、役人は

いつて、男を、鉄でつくった、狭い牢の中にいれてしまいました。

男は、その鉄の牢の中では、自由に歩くことすらできませんでした。また、指を出すにも出されないように、外部は、金網で張られていたのです。

もう、こうなつては、赤い舌を出して笑うどころではありません。男は、ただじつとしていました。どんなに寒くても、また、どんなに暑くても、ただ、じつとしていなければならなかったのです、さすがに男はいまは後悔したのでありました。

「神さま、私は、人間に生まれてきたばかりに、つい、みんなよりも樂をし、またおもしろいめをしようとする氣になりました。それで、うそをついたり、他人のものを盗んだりしたのです。私は人間になりたいとは思いません。ほんとうに一匹きの虫でもいいから、この強欲な心と不正の考えを、私からうばってください。そして、私を虫にしてください。私は、虫となつて、神さまのおぼしめしに従つて、自由に生活をしたいと思ひます。神さま、どうぞ、私を虫にしてください！」と、いっしんに、牢の中で祈つたのであります。

ある朝のこと、男は、そこに見えませんでした。番人は、夢かとはばかりにびっくりしました。

「あの男は、どこへいったろう？　ねずみでさえこの金網の目はくぐれないはずだ。ふしぎなこともあればあるものだ。」といって、さわぎたてました。

役人たちは、集まってまいりました。そして、みんなは、頸をかしげました。

「この世の中に、魔法を使うというようなことが、はたしてあるものだろうか？」

錠のかかっているのを役人たちははずして、狭い牢の扉を開いて中へはいり、くまなく、あたりを調べてみました。

このとき、一ぴきのおけらが、入り口から出て、だれも、それに気のつかなかったまに、町の方を指して、大地をはっていったのであります。

もう、すでに世界は、夏から秋にうつりかけていました。空の色は青く晴れて、長くつづく道は、白く乾いていたのであります。

おけらは、あちらの青い空の下に見える街の建物望んで、自分のすむところをその近くに定めようと思ったのです。とんぼや、はちは、美しい羽を輝かしながら、頭の上の空を自由に飛んでゆきました。おけらは、なぜ自分には、あのような自由に飛べる美しい羽がないのかと怪しましました。そして、途中で水のたまったところに出て、自分の姿を、その水面に映して見たときにびっくりしたのです。

「なんとという私は、みにくい虫に生まれてきたのだろう……。」

おけらは、恥はずかしくなりました。しかし、神かみさまは、これがために、この虫むしに、反はん抗かう心を起おここさせるようにはしなかった。そのかわりに、つつましかな謙遜けんそんの心こころを与あたえられた。おけらは、どこか、野菜畑やさいばたけか、果樹園かじゆえんのすみ、あまり世間せけんに知られずすむ、自分じぶんの小さな穴あなを掘ほつてはいるために、乾かわいた道みちを急いそいでゆきました。——人間にんげんが一夜やにして、おけらになったというようなことは、ひとり神かみだけが知り、またこうした奇蹟きせきは、神かみだけがよくなし得うることでした。神かみは、自分じぶんの創造そうぞうしたおけらが、いま道みちを歩あるいてゆくのを、じつと青い空あおそらからながめていたのです。

ちようど、このとき、美しい花嫁はなよめを乗のせた自動車じどうしゃが通とおりました。花嫁はなよめは、金銀きんぎん・宝石ほうせきで、頭あたまや、手てや胸むねを飾かざっていました。そして、はなやかな空想くうそうにふけていました。その自動車じどうしゃは、町まちの方ほうから、同じ道おなじみちをこちらに向むかって走はしつてきたのです。

神かみさまが、はつと思おもうまもなく、自動車じどうしゃは、おけらを轢ひきつぶして過すぎていつてしまいました。このことは自動車じどうしゃの上うへに乗のっている花嫁はなよめも知らなければ、ただ神かみさまよりほかにはだれも知らなかつたことです。

神かみさまは自分じぶんが悪わるかつたと感かんじられました。そして、罪つみもない、おけらの一生しやうとしては、

あまりに、はじめであつたと思われました。

「やはり、人間にんげんにしてやったほうがいい。」と、考えられて、おけらは、特別のおぼしめしで、人間にんげんにされたのであります。

男おとこは、ふと目をさしました。すると、自分じぶんはよくないことをして、捕とられて、牢屋ろうやの中なかにおりましたが、鉄の牢てつろうにもいなければ、また実際じつさい、自分じぶんが魔法まほうを使つかつて、牢屋ろうやの中なかから消えるなどということはあり得なかつたことでした。

あるとき、自分じぶんは、そんなことを空想くうそうしたことがあります。そして、前夜ぜんや、ふしぎにも、虫むしになつた夢ゆめを見たのでした。

彼は、いまさら、口くちもきかなければ、したいと思おもうこともできない虫むしもあるのに、口くちもきければ、したいと思おもうこともできる、すべての生き物いのものの中なかでいちばん自由じゆうに生活せいかつされる人間にんげんに生まれてきて、心こころ柄がらから、みずから苦くるしまなければならぬ愚おろかしさを悟さとりました。彼の性質せいしつは、このときから、だんだん善ぜん良りように変わかつてまいりました。

それほどの悪いことわるをしたのでもなかつたから、男おとこはじきに自由じゆうの体からだとなつたが、その後のちは、約束やくそくは守まもり、うそはつかず、また悪いことわるをしなかつたので、人々ひとびとから信用しんようされるようになったのであります。

青空文庫情報

底本：「定本小川未明童話全集 5」講談社

1977（昭和52）年3月10日第1刷

初出：「赤い鳥」

1926（大正15）年10月

※表題は底本では、「おけらになった話《はなし》」となっています。

入力：特定非営利活動法人はるかぜ

校正：江村秀之

2014年1月18日作成

青空文庫作成ファイル：

このファイルは、インターネットの図書館、青空文庫（<http://www.aozora.gr.jp/>）で作られました。入力、校正、制作にあたったのは、ボランティアの皆さんです。

おけらになった話

小川未明

2020年 7月18日 初版

奥 付

発行 青空文庫

URL <http://www.aozora.gr.jp/>

E-Mail info@aozora.gr.jp

作成 青空ヘルパー 赤鬼@BFSU

URL <http://aozora.xisang.top/>

BiliBili <https://space.bilibili.com/10060483>

Special Thanks

青空文庫 威沙

青空文庫を全デバイスで楽しめる青空ヘルパー <http://aohelp.club/>
※この本の作成には文庫本作成ツール『威沙』を使用しています。
<http://tokimi.sylphid.jp/>